AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録（2014.12）平成２５年度:69.

糖尿病患者との病の経験の語りと語りによる治療継続への影響

平間 幸子, 安田 潤, 金田 豊子

糖尿病患者との病の経験の語りと語りによる治療継続への影響

７階東ナースステーション　　平間　幸子、安田　　潤、金田　豊子

【目的】

２型糖尿病患者との語りを通し患者看護師が病の経験を知り､問題とその影響を明らかにする事を目的とする。

【研究方法】

対象：50 歳代女性、２型糖尿病

データ収集方法：病の経験について半構成面接法を用い面談を行った｡得られた内容を要約し意味づけを行った。

分析方法:得られた内容からエピソードを抽出し､ストーリーの構成・解釈を行い、問題とその影響を分析した。

【倫理的配慮】

倫理委員会の承認を得て、研究の主旨、プライバシーの保護を書面と口頭で説明し同意を得た。

【結果】

患者がつけた題名は「生活に追われた毎日と糖尿病」であった。語りから【自分の治療よりも家族を優先にしてきた生活】【家族にとっての自分の存在や役割】【諦めていた自分から頑張ることができる自分への変化】【自己の強みの認識】【語りを通して見出した気づきと新たな目標】【未来への展望】の６つのエピソードを抽出した。

【考察】

患者は題名のように、糖尿病に罹患後から忙しい生活を送り、家庭や仕事を優先し、自分の体のケアや治療行為を後回しにする行動パターンを繰り返していた。語ることで、【自分の治療より家族を優先にしてきた生活】を自覚できた。また､患者にとって家族の存在は大きく、行動パターンの改善を考えながらも、自分を否定することなく【家族にとっての自分の存在や役割】を見出していた。

前回からの入院を通して【諦めていた自分から頑張っている自分】へと変化がみられ、【自己の強みの認識】へ繋がっており、成功体験から自己効力が高まっていたことが考えられる。また、【語りを通して見出した気づきと新たな目標】と【未来への展望】を示していた。これは、Ａ氏の役割や強みの認識が大きく影響していると考える。今回､語りに題名を付け意味づけをすることで、今までの行動パターンを患者看護師共に気づくことができた。また、問題点が明確になり、問題に与えている影響も明らかになった。